

## 時の風に吹かれて

仲島陽一

横溝正史の『八つ墓村』(1951) はみなさんご存じだろう。読んでから見たか、見  
てから読んだかはわからないが、里村慎太郎という登場人物を覚えているだろうか。  
主人公辰也が後継ぎとして呼ばれる田治見家の分家の当主であり、辰也と深い関係  
になる典子の兄である。軍人としてはぶりがよかったのが敗戦で「尾羽打ち枯らし  
た」浪人としてくすぶっている。莫大な田治見家の財産の利害関係者として、辰也  
ははじめ連続殺人の容疑者とみなしていた。しかし後に「膝をまじえて語ってみる  
と、それほど凶悪な人とも思えず、また策を構えて他人を陥れるというような人柄  
ではなさそうだった。むしろこの人は案外単純な人なのだ」と見方を変える。する  
と今までの解釈も次のように変えることになる。「単純だからこそ、敗戦のショック  
から、まだ立ち直ることが出来ないのだ」(角川文庫版、341頁)。私ははじめこの言  
い方がひっかかった。これは慎太郎(的人間)の弁護の言葉であるが、「単純な人」  
ということで、過去を反省し人生を変えることが出来ない旧軍人を弁護してしまっ  
てよいのだろうか、と。はじめ読んだときの私は、書いたときの作者と比べて、若  
く人生経験も乏しかった。その後次第に、これも一理と思うようになってきた。確  
かに、いち早く悟って正道に進んだ人もいる。しかしまた単に便乗して、今まで「鬼  
畜米英」を叫んでいたのがアメリカン・デモクラシーの宣教師に転じたり、「非国民  
の赤」を迫害していたのが革命の旗振りになったような者もいる。そう思えば、間  
違った信念であれ、心から追求していたものが簡単に捨てられないのは、「単純」で  
もあろうが正直とか誠実とかにも通じる面がある。また終戦直後に多くの国民が「虚  
脱状態」にあったというのは、愚かと嗤うことはできないだろう。王政復古で帰国  
したフランスの亡命貴族(エミグレ)について、「何も学ばず何も忘れなかった」と  
述べられる。確かにこれは批判されるに値するが、ここから考えさせられるのは、  
このような場合に「学ぶ」とはどういうことかということである。

早くも「ポスト・コロナ」の言説がとびかっている。そのなかには、いま苦しん  
でいる人を自分がどう助けられるか、といったことは気にもせず、新たな事態に先  
回りをして自分(たち)がうまく利用することを求めている者たちがいる。無論こ  
れを教訓として、人々の安全のためによい世の中への変化を考えている人々もいよ

う。ただ、ともかくも「もとの暮らし」に戻りたいと願っている人々を、愚かと非難してほしくない。また今回の事態で大きな悲しみや苦労を経験した人々が、まずはゆっくり休みたいと感じても、無気力な者、ネガティブなダメ人間と鞭打ったりはしないでほしい。人間には喪の期間や休む時間が必要である。またそれらをスキップしたり早送りしたりすると、後に大きな躓きのもとになりがちでもある。

(2020.6.1)